

# 浄土

1989-5

昭和十年五月二十日  
昭和二十四年四月二十八日  
平成元年四月二十五日印刷  
（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行  
（運輸省 特別扱承認雑誌） 第三二五号  
第五十五卷  
五月号  
平成元年五月一日発行





## 五月の秀句

風音の山の上ゆく夏始

新緑や暁色到る雨の中

長距離電話母の日母の顔見たし

星野 麦丘人

日野 草城

篠原 清子

# 五月号



汝ら衆生まさに是の称讃不可思議功  
徳一切諸仏、所護念経を信ずべし。

——『阿弥陀経』

## 目次

<ずいそう…「つくづく法師抄」>

元祖大師の

浄土宗御開宗を追想する……………眞野孝信……(2)

### 法 話

上人遠流の結縁化導……………村瀬秀雄……(10)

### 童話の世界〔Ⅱ〕

音(その二)——「ココロココロってなんの音」…ぬのむらてつや……(24)

新「生死一如」への提言(上)……………藤木雅清……(16)

### 《四行詩》

鉄線の花……………清川宗治……(23)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <26>

海と山の狭間で

——我が思い出に住む犬たち(12)——

……………木下隆一……(30)

### ◇◇長篇連載◇◇

伝弘の生涯(5)

——大僧正岩井智海伝——

……………松浦行真……(37)

表紙絵 小林治郎画

◇◇すいそう……「つくづく法師抄」◇◇

## 元祖大師の浄土宗御開宗を追想する

——選択本願の念仏——



眞ま野の孝こう信しん

(八幡市正法寺住職)

暖冬は春の訪れを早め、桜花これに倣なまって開期例年を待たず、リクルート問題に揺れる政界の不安をよそに、民衆は観桜の延ひきだを展べて杯を交し、手拍子と歌謡と歓声に、流れる時を忘れて、束の間の享楽に明日の英気を養

う光景は、誰が見ても楽しいものである。四月七日は宗祖降誕の聖日である。想えば十五年前、昭和四十九年（一九七四）四月七日「法然上人浄土宗開宗八百年記念慶讃大法要」が厳修された中日であった。高倉天皇承安五

年（一一七五）の春、元祖大師四十三歳、高祖唐の善導大師「觀經の疏」（觀無量壽經の註釈書）に教導されての立宗であり、この法縁奇しくも、元祖大師幼童（御幼名勢至丸さま）九歳、父君漆間時国公の非業の死を遂げられたのは四十三歳であつた。九歳の幼童が父君死去と同年に達して臨終枕頭の遺訓に報ず、この間の不屈にして真摯な懸命の御精神は、その御伝記である勅修御伝に、法然上人讃仰の流暢な筆致は余すところなく録されて吾等末徒に感涙を呼び、慈恩上酬の念を自覺せしめる芳躅を拝することが出来る。

浄土門主岸信宏大僧正親下の御下命を拝して、浄土一宗大法要に宗議會を代表し、左導師としての光榮に浴した拙衲にとって、元祖大師の御開宗追想は、浅学不徳を充分承知しながらも、齡七旬に及ばんとする末徒の抑止し得ぬ真情の御悔容を請い願いつつに筆を運

ぶものである。

開八（開宗八百年の略称）大法要の中日四月七日も、この日の記念写真帳に、「庭儀式、千余の僧衆桜下行く」との私記の通り、沿道の桜は満開であつた。大殿法要の盛儀を了り、行程二軒余に及ぶ庭儀式（お練りの行列）の沿道を埋めた観衆、特に大殿日中法要に国内は勿論、海外からも参拝された満堂の檀信同行衆が、僧俗一体となつて唱和する念仏の聲は、東山華頂山頭をゆるがせ、それは、元祖大師御開宗の恩澤に浴す末徒の法悦謝徳の大歓声でもあつた事を想えば、その意義の深奥と万機普益（誰も皆、もれなく法益に浴して救われる）、究竟大乘（究めつくされた大乘仏教——無上至極の大乗教）の浄土門であることを、つくづく感激するとともに、これを伝承する布教の使命を更めて痛感する拙衲の胸奥に、負荷の重みを覺えた。

偕、元祖大師法然上人御開宗の意義は、大師御自ら「吾、淨土宗を立つるころは、凡夫の報土に生れんことを示さんがためなり」と宣べられ、宗名を自ら求められ、凡夫救済の根源を阿弥陀仏の本願に仰がれたのである（拙述『淨土』五十四卷九月号を参照下さい）。

「選択本願の念仏」これについて元祖上人は「予は選択の一義をたてて選択集をつくるをり」（『淨土宗要集聴書』）第三祖記主禪師良忠上人述）とあり、選択本願の念仏こそ、元祖大師の主唱勸奨された念仏を特色づける用語である。

特に、第二祖弁長上人（鎮西聖光上人）は、「選択本願念仏に三義ありとして、第一に念仏と云うのは、諸師の立てる口称念仏。第二に本願と云うのは、善導大師の立てられた本願念仏。第三に選択というのは、元祖大師法然上人の立てられた選択念仏である」（『徹

選択本願念仏集」上）と説述され、第三祖良忠上人は、これを更に詳述して「第一義については、万行随一の念仏で、未だ正雜（正行と雜行）助正（助業と正定業）を分かつたず、第二義については、万行の中に正雜を分別し、更に助正を細判したところの正定業（阿弥陀仏の正しく定めおかれた行業）であり、阿弥陀仏の本願に順ずる称名念仏を指すとし、故に雜行を止めて、専ら念仏を行ず」と述べ、「第三義について、本願義の上においてさらに選択の一義を加う」としている。

選択の一義を加えられたことについて、「これは祖師上人（先祖大師）、大阿弥陀經によつて始めてこの義を立つるなり。所謂その本願とは、二百一十億の諸仏願行のなかより選択したまうところなり」と説示されている。又、元祖大師の選択集（選択本願念仏集）に、三種の念仏を説かれていることについて

も、良忠上人は「この集〔選択集〕」のなかに、つぶさに三義を存するにあらず、三義相成してただ一義となる。いわく、念仏は、ただの念仏にあらず、即ち本願の念仏なり。本願の念仏は、ただの本願の念仏にはあらず、即ちこれ選択本願の念仏なり。」と入念に説述されている。高祖善導大師の本願と元祖大師の選択は、異辞同義にして、選択本願の念仏こそ、吾等凡夫の決定心（ゆるぎなき一途な心）と正定業の、謂うなれば信行の本源であり、生死ともにわづらいなき、安らぎの生活源とさせていただく正真のお導きである。

時流は大衆意識の变革を呼び、「世間虚仮、唯物是真」（世のなかは浅はかにして偽り多く、唯仏のみ真実なり）の言を痛感せざるを得ない現代にあっては、人生の真の依りどころを仏教に求める人が多く、特に識者の真摯な求道か

ら発せられる問いかけは、単なる学問としての仏教でも哲学理論でもない。実人生の体当りであり、「信」の納得である。今、生きる人間の真実道であり、人間の宗教でなければならぬ。前段に記した拙い宗意念仏のこと、ただ私事を満たす感激の追想でなく、時代のニーズに、少しでも資助するところあればとの哀情ではあるが、僧職の使命を思うとき、忸怩たるを禁じ得ない。

努めて独断と偏見をさけ、宗意に背くことをおそれて、二祖（高祖と元祖）三代（法然、聖光、良忠の三上人）のご述作に依る説明を記したが、一期の生を、有意義に生き遂げる方途としての「一向専修念仏」の願三往生行を「万機普益」——（如何なる人も、みな悉く余すことなく救う）の願意から、先づ仏教を聖道門と浄土門の二門に分け、難行道を捨て易行道に道を求めた。この「捨聖帰淨」のご決断は、

善導大師（觀經疏）の所謂「一心專念」の文——要意「一心に専ら弥陀の名号（南無阿弥陀仏）を念じ（称え）て、時節の久近を問うことなく、念仏に捨てざる者、是れを正定の業と

名づく。彼の仏の願（阿弥陀仏の本願）に順ずるが故に」——（註）又の名を「御開宗の文」に依り、浄土立宗となったことは周知の通りである。

●善導大師の浄土往生の行業に対する分類（「觀經疏散善義」の表示

（正行と雜行）

（正定業と助業）



（註）正行の中で助業としての行為は、何れも正行の中の正定業を助ける行為である。

右の表示の中で、「稱名正行」（正定業）

「仏の本願に順ずるが故に」（順に彼仏願故）

——念仏——專修——こそ、願往生行の実践体

系の要であることを領解することが出来る。

現代の日本は、經濟大国と謂われ、自由と我欲概ね満足し、生活情況も他国に比して充

足してはいるが、生きさまの根底に不安を抱く人は多い。眞の幸せを求めながら眼前の氣樂に安住し、果ては榮華の夢路に遊ぶ類に墮して、流行の衣服に装身具をつけ、当てもなく盛り場を得意げに往く人の姿に似て、その足どりには確かさが観られない。この浮薄、輕率にこそ、魔のさしこみがある。何時の間にか、六識（眼、耳、鼻、舌、身、意の六識）昏迷（正しい機能のはたらきを失う）の疾を覚え、慢性化する疾患になれて、寧ろこれを常態として、「榮枯盛衰のならい」などは忘却の彼方の警鐘となつて了つた感じではあるが、打ち鳴らされる大音（仏のみ声）は、常に人間世界を覆うようにして、十方世界に響流（ひびきたる）することする。諦聴せよ（あきらかに聴け）！ 思念せよ（よく考えてみよう）！と。

或る信者から「專修念仏の一行は確かに私達凡夫にとって、有難いみ教えでありますが、

けっこうな教え、有難い教えと思う教えは、少しでも多く信じて、修行することが、何故だめなのか解からないのですが？」と真剣に問われた拙稿は、その場で「雜行の十三失」について、その大要を話し、「非常に大切なことについてご質問をいただき有難う。浄土宗では、五重相伝（浄土宗信者に対して、宗義の重点を五段階に重ねて伝授する大切な儀式）においても詳述しないが、吾が宗の自讃毀他（自宗を讃え、ために他宗をけなすこと）の誤解を招かぬためと、確かな教示のために、更めて説明致します。う。その時には、私のつたない大要の説明でなく、このことを入念に説かれた典籍に基いてね」と。後日を約して左の通りの写筆をもつて応答したことである。

### ◎雜行十三失（選撰伝弘決疑抄）卷第二

1 雜念亂動シテ正念ヲ失ス故

2 仏ノ本願ト相応セザル故

3 教ト相違ス故

4 仏語ニ順セザル故

5 信念相続セザル故

6 憶念間断ス故

7 回顧真実ナラザル故

8 貪瞋諸見ノ煩惱来ッテ間類ス故

9 慚愧懺悔ノ心有ルコト無キ故

10 相続シテ彼の仏恩ヲ念報セザル故

11 心に輕慢ヲ生ジテ、業行ヲナスト雖モ常ニ

名利ト相応スル故

12 人我自ラ覆ウテ同行善知識ニ親近セザル故

13 樂シンデ雜縁ニ近ズキ、往生ノ正行ヲ自障

障他スル故

以上の十三項にわたって入念に、項目の内容によつては、現代の時事を例にとつて話し合い、信者は一々に肯き、ときには自らも時

事の実例を挙げて納得され、最後には、にこやかな微笑をうかべて悦んでいただいたが、詳細の筆録を省かせていただき、字の声なき語りかけをお相手に、祖師先徳の吾等末徒の爲に遺して下さったお慈悲の御配意を汲んで、この拙文の読者と共に報謝させていただきたい。拙稿のご容認を乞う次第である。

「如来の光明は遍く十方の世界を照し、念仏の衆生を攝取して捨て給わず」

記主上人は、「所求（目的）所歸（信仰対象）去行（実践の行法）ともに専ら西方（浄土）の弥陀に帰一した行業である」と、「心に助け給えと存じ、口に南無阿弥陀仏と称える」結帰一行の宗意を述べられた。

「念内にあれば言外にあらわる」「信ずと

いへども行ぜざれば、信ぜざるに同じ」

厭穢欣浄へ穢土を厭い離れて浄土を欣い求める信念は、必ず厭穢欣浄の行を伴うもので

あり、信仏の生活は、信仰の事実となつて現れ、行は願を深め、願は行を強くするものであつて、願と行は相互に励みの原動力となつ

て、心と行は相資（相互資助）の関係にあることを名号の上にいただくのは、願行（心行）具足の証である。

（名 号）（願）

南 無 — 「至心信樂」 — 願（安心）

阿弥陀仏 — 「乃至十念」 — 行（起行）

（註）「……十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念……」

右の表示は、阿弥陀仏の四十八願の中で、第十八願（浄土宗では特に王本願とする）の願意を、善導大師が釈された文をもつて、「願行具足の証」とするにとどめて、止筆するもの

であるが、選択本願の念仏をいただいて、今生を生き遂げることには確信をいただく凡僧の法悦は、年毎に桜花の語りと共に元祖大師の浄土宗御開宗を追想する次第である。

## 上人遠流の結縁化導



村瀬秀雄  
むら せ ひで お

法然上人流罪の宣旨が下りたのは、上人七十五歳の建永二年（二二〇七）二月十八日のことであった。そして宣旨には「流人藤井の元彦」と記されていた。上人は僧侶の身分を証する度牒を取り上げられて、単なる一罪人としての取扱いを受けたのであった。釈尊出世の本懐の宣揚に努めてきた上人に、一体どのような罪があったというのであろうか。門弟たちの嘆きと悲しみの深さは喩えようがなか

った。法蓮房信空は上人にいった。

「表向きは一向専修の法門を広めることを中止する旨を上奏し、内々で教えを説いて教化なされてはいかがでしょうか」

しかし上人は答えていった。

「流刑にあったことを決して恨みに思ってはならない。何故なら齢がすでに八十に近くなつたからである。たとえ師弟が同じ都に住んでいたにしても、この世の分れは近いといわ

なくてはならない。たとえ山や海を隔てた所にいても、極楽浄土で再会さることは疑いないのである。またこの世を厭っていても、寿命が尽きなければ存命するのが人の身である。この世を惜しんでいても、急に死ぬかも知れないのが人の命である。老少不定は場所によって変るものでない。そればかりでなく念仏の法門を都で説き始めてから年久しくなる。いつかは田舎に赴いて多くの人たちに念仏の教えを勧めたいと思っていたことは長年の願いであつた。しかし機会がなくて果せなかつた。今このような因縁によって年来の望みが遂げられることは、すこぶる朝恩であるといつてよい。念仏の法門が弘通するのは時代に適した教えであるからであつて、人の力で停止させようとしても法門の弘通を止めることはできない。諸仏が人々を救い給う誓いは深く、諸天の善神が仏法を守護し給う約束

は懇切である。それならば世間の機嫌を憚つて經典や釈文の真意を隠す必要がどこにあるか」

上人は弟子たちをたしなめてから、傍にいた一人の弟子に一向専念の意義を説いて聞かせた。これを見ていた西阿弥陀仏は、そのように説法することは止めるように頼んだ。すると上人は決然としていった。

「自分はたとえ死刑に行われることがあつても、一向専修の教えを説かずにいるわけにゆかぬ」

上人の態度に至誠の様子がありありと見えていた。上人を見守っていた人々は、いずれも万感胸に迫つて涙を流した。

こうして上人は六十余人の僧の見送りを受けたが三月十六日に都を發つた。そして南に下つて下鳥羽につき、その船着場から船に乗つて川を下つた。やがて播磨の国（兵庫

（県）高砂の浦に着いた時に、七十歳余りの老翁と六十歳余りの老女の夫婦がきて、上人に訴えていった。

「私たちはこの浦に住む漁師です。幼い頃から漁を仕事とし、朝に夕に魚の命を奪って世渡りをしてきました。生物を殺す者は地獄におちて堪え難い苦しみを受けると聞いています。どのようにしたなら、その苦しみから免れられるでしょうか。どうかお助け下さい」

上人は哀れに思い、そのように殺生を業としている者であっても南無阿弥陀仏と唱えれば、仏の慈悲の本願に乗じて必ず極楽浄土に往生できるという道理を懇ろに教えた。二人は大いに喜んで昼間は浜で念仏を唱えながら漁を続け、夜は家に帰って遅くまで声を合せて念仏を唱えていた。

次いで一行が室の泊り（室津港）に着いた時に、遊女を乗せた小舟が近づいてきた。遊女

は上人にいった。

「法然上人のお舟であると承り、推して参りました。世を渡るのにいろいろな道があるのに、前世にどのような罪があつてこのような身になったのでしょうか。この罪深い身はどのようにしたなら、後の世で救われるでしょうか」

上人は教えていった。

「もし世渡りするのに外の手立てがないとすれば、そのまま専ら念仏を唱えているのがよい。阿弥陀仏はこのように罪深い者までも救うために、誰でも往生させる本願をたて給うたのである。ただ深くこの本願を頼めばよいのであつて、敢えてわが身を卑下してはいけない。本願を信じて念仏を唱えれば、極楽往生できることに疑いがないのである」

そして上人は三月二十六日に讃岐の国（香川県）塩飽島に着いた。島を管理していた駿

河權守高階保遠入道の西忍は上人の來訪を受けて早速に藥湯を用意し、料理を整える等して、できるだけのことをして上人を持て成した。それというのも西忍はかねてから上人の名声を聞いて知っていたからであつた。漁師の老夫婦が上人に教えを求めて訴えたり、遊女が上人の船であることを知っていて推参したのも同じであつて、いずれも上人の名を知っていたのである。上人は東山大谷の坊に住んでいて、請われるままに教えを説いていたに過ぎなかつた。それにも拘らず上人の名は念仏の教えとともに全国に伝わっていた。念仏の法門が速やかに広まったのは念仏聖の活躍によるものであるといわれている。しかし人々が念仏聖の説法に進んで耳を傾けていたというのも、上人の名が広く喧伝されていたことによるものであつた。

当時の人々の興味は都のでき事に敏感で

あつて、細かな情報までも逐一耳にせざるを得なかつた。上人二十四歳の時に保元の乱があり、上人二十七歳の時に平治の乱があつて平家の政権が確立された。上人四十八歳の時に東大寺が焼かれ、上人五十一歳の時に木曾義仲が京都に入つた。そして上人五十三歳の時に平家が壇ノ浦で滅んでしまつた。こうした政権の争奪ばかりでなく比叡山と興福寺の強訴があり、更に両者は相互に抗争を続けた。その一方には地震と飢饉があり、疫病が流行し、盜賊が横行した。そして上人六十歳の時に源頼朝が征夷大將軍に任ぜられた。こうして人々の関心が漸く束のでき事から離れようとしていた時に改めて人々の耳を歌てさせたのは、時の権力によって念仏の法門を停止させようとする運動であつた。上人七十二歳の元久元年に延暦寺の衆徒が念仏停止を上奏するようにと座主の真性に訴え、その翌年に興

福寺の僧たちが念仏禁断を院に上奏した。そんな時に住蓮、安樂の問題があつて上人の遠流となつた。当時の人々にとつて、こうした一連の事件が理解し難いものであつたので、それだけ一層地方に速く広く伝わつた。つまりはこうした事件が比叡山や興福寺の意に反して、上人の名声と念仏の教えを全国に周知させるという逆の結果を招いたのである。

さて上人は西忍に念仏往生の教えを細かに授けてから、次のように語つた。

「常不輕菩薩は想つた人々から杖木を扱われたり瓦石を投げられたりしたが、どのような乱暴にも耐え忍んでいて、やがて男にも女にも仏の教えを信じさせた。このようにどんな方法を講じても人々に勧めて念仏を唱えるようにさせなくてはならない。人々に念仏の法門を説くことは何人も他人のためばかりでなくて、自分のためなのである」

常不輕菩薩は誰に逢つても必ず恭しく礼拝してから、次のように讃歎していった。

「私は貴方たちを深く敬います。決して輕んじたり侮ったりしません。何故なら貴方たちは何れも菩薩の行を修めて、必ず仏になる人たちだからであります」

人々は菩薩からいきなり礼拝されたり、讃歎されると戸惑つて腹を立てた。人々は菩薩に向つて悪口をいい、罵つて杖木を振るい、あるいは瓦石を投げる等の乱暴を行った。しかし菩薩はどのような仕打ちを受けても耐え忍んでいたの、やがて男にも女にも仏縁を結ばせることができた。菩薩は礼拝讃歎の行を積むことによつて仏となつたが、実は常不輕菩薩とは釈尊の前身の名であつた。

この菩薩が人々にいつた言葉について、二つの解釈がなされている。一つは人にはすべからぬ素質があるということである。

即ち人として基本的な性格として仏になれる可能性を持っていることを説いたとする。この性格を表に現わすために菩薩行を修めなくてはならない。二つは菩薩が故意に人々を怒らせて教化したとする。即ち菩薩は人々が怒ることを知っていて、わけもなく礼拝讃歎したとみるのである。このように人々に誹謗させて教化することは逆の手段を用いることであるから、これを逆化といっている。

上人は末法の凡夫にとっては難しい教義や修行は適さないとして、修め易い念仏の法門を説いた。それが南都北嶺の怒りをかい、不法な圧迫を受けて流罪になったのである。しかし上人はこうした圧力に屈することなく、遠流の旅路にも有縁の人々を教化して導き、反って念仏を広めることになった。上人が配所に入ってからの様子について、御伝は次のように記している。

「上人は讃岐の国の小松の荘に落ちつくことになった。近くにあった生福寺に住んで世の中の無常の道理を説き、念仏の行を人々に勧めた。近郷から男女貴賤を問わずに多くの人々が集まり、上人の教えと導きを受けようとしたので、寺の門前は市をなしたように賑った。人々はあるいはよこしまな考えと遊逸な行いを改め、あるいは自力難行の行に執着する心を捨て、そして念仏の教えに帰依したのであった。上人が都を発つ時に辺土の教化を思えば流刑もかえって朝恩であると喜ぶようにしていったのも、まさしくその通りになったのである」

念仏の法門は正しく時代に適應した教えであつたからこそ、忽ちにして人々の心の奥深くに浸透したのであつた。

# 新「生死一如」への提言(上)



## はじめに

従来の「死」をタブー視する風潮に反発するように、近年、「死」をテーマとした出版物、講演会、シンポジウムなどが盛んだ。その多くは、「生と死の〇〇」とタイトルを冠し、「死を避けずに擬視することによって、いまある生の意味を考え充実させよう」という趣旨のスローガンを掲げている。そして、そうしたなかで、仏教者をはじめ多くの分野

藤木雅清  
ふじき が せい

(DES—臨死問題研究会会長—  
東京・中野区真源寺副住職)

の人たちが「仏教では生死一如と申しまして云々」と書き、かつ発言している。しかし、この多用されている「生死一如」とはどういう意味なのだろうか。一見、わかったようなつもりになる言葉だが、典拠はどこにあるのか、仏教のどのような教義のなかで位置づけられているのだろうか。かかる疑問を述べると、己れの無学、無勉強を露呈するようなものだが、このテーマに対する筆者の疑問の過程を述べて諸兄のご指導をお願いしたい。

### 「セイシ」と「ショウジ」

まず、「生死」を何と読むか。また、どういう意味なのか。小学館『日本国語大辞典』から引用してみる。

せいし「生死」 生きることと死ぬこと。また生まれることと死ぬこと。

しょうじ「生死」 ①仏語。生まれ変わり死に変わりして輪廻すること。②生きるこ

とと死ぬこと。また生かすことと殺すこと。いきしに。③生まれてから死ぬまでの

あいだ。生きている間。④「生」より「死」に重きをおいて。『括弧内原注』死

ぬこと。死。

日本語としての「生死」にはこれらの意味があるらしい。そして、その後にある小見出し(慣用句)は、「生死即涅槃」「生死の苦海」など十八語もあるのに、なぜか「生死一如」はない。なぜか。

つぎに仏教辞典を引いてみた。『望月仏教大辞典』はじめ、いくつかの仏教語辞典を引

いたが、やはり「生死一如」の語は見出せなかった（仏教語辞典にはいずれも「セイシ」の項はなく「ショウジ」の項のみ）。なぜか。

いまだに「生死一如」の典拠は見出し得ていない。ゆえに、その意味も判然としていない。しかし、いくつかの周辺典籍から愚考すると、どうも鎌倉時代の禪家あたりらしい。そして、そのもとは、『中論』の「不生亦不滅」にあり、そこから「生死即涅槃」↓「生死不二」↓「生死一如」という解釈が出てきたらしい。

ここまでクドクドと「生死一如」の発生源を述べてきたが、それを追求するのが本稿の目的ではない。

つまり、日常的に使っている言葉としては、「セイシ」は「生きていることと死ぬこと」の意、「ショウジ」は「生まれることと死ぬこと」（そして仏教的には「生死を繰り返さざるを得ない輪廻転生の存在」）の意と整理することができよう。拡大解釈として、生まれるということは、以後生きていくことを意味するのだから両者は同義であるという考えも成り立つかも知れないが、これから述べようとするテーマにおいては根本的なちがいを生ずるので、以下、本稿では、上述のふたつの意味を「セイシ」「ショウジ」と使い分けることにしたい。

### 「生苦」とはどんな苦か

冒頭に、仏教者はじめ多くの分野の人たちが「仏教では生死一如と申しまして云々」と

発言していると記したが、そのほとんどの人は「ショウジイチニョ」と発音し、「生きて  
いることと死ぬ（死んだ後の）ことと別のことではない」という意味で使っている。仏教者  
でもほとんどの方がそうだ。シンボジウムなどの「生と死の〇〇」というタイトルも、ほ  
とんどが「セイシ」の意味で使っている。つまり、上述したふたつの意味でいうと、「生  
死」を「ショウジ」と発音しているにもかかわらず、「セイシ」の意味で使っていること  
になる。もちろん、その意味での「セイシイチニョ」が「生きていること」を考えるうえ  
で貴重な提唱であることに異論はないが、仏教の教えとして紹介するならば、その根拠は  
どこに求めるのだろうか。少なくとも、「生死一如」なる語が仏教辞典にも国語辞典にも  
ないのに……。

なるほど、一般的には、死を恐れ、それゆえに生を充実しえない人に「いまある生（せ  
い）も死も区別はありませんよ」という教えは魅力的だ。響きもいい。もし、仏教的な根  
拠があったらぜひご教授いただきたい。これまで、上述したような疑問から、筆者は意識  
して「生死一如」といわないようにしてきたが、もし根拠があるなら使いたい言葉ではあ  
る。

このような考察自体、ややもすると「言葉の遊び」的になるのでここまでとし、以下、  
本論を述べていきたい。

仏教的には「セイシ一如」ではなく「ショウジ一如」であるべきであると述べた。なら  
ば、その「ショウジ一如」とはいかなる意味なのか。「生まれることと死ぬことはべつ

ことではない」とはどういうことか。たしかに「シヨウジ一如」より「セイシ一如」のほうがわかりやすい。それゆえに、仏教者までもが「シヨウジイチニヨ」といって「セイシ一如」をいうのであろう。

仏教語でいう「シヨウジ」が「輪廻転生の存在」のことであると述べた。それは「生まれること」と「死ぬこと」を繰り返すという意味からの転訛であるからこそ出たことであり、「生きること」と「死ぬこと」の意味からはけっして輪廻転生という語は発生し得ない。つまり、四苦のうちの「生死」なのである。この生老病死は、四有の「生有」と「死有」、そのあいだにある「本有」のなかの老病と考えてもいいだろう。

つぎに、「四苦」のうち、われわれ日本人にとってもっともわかりにくい「生苦」について考えてみたい。

「生苦」は、「生きる苦しみ」ではなく、「生まれる苦しみ」である。たしかに「生は是れ老死の縁なり（『長阿含経』）」というように、「生まれる」ということは「これから老・病・死を経験する存在として生きていかなければならない」と解釈できなくもないが、「生」は、「生とは出相なり。所謂五種あり、一には初出、二には至終、三には増長、四には出胎、五には種種生なり」（『大般涅槃経』）とあるように「生まれる」と解釈すべきであらう。（多くの仏教学者が、仏教でいう「生」は「生きる」ではなく「生まれる」の意であることを強調している。）「生苦」について、『望月仏教大辞典』ではこの『大般涅槃経』を紹介し、「是れ入胎より出生に至るを生苦となすの説なり」としている。

さらに、生苦が「生まれる苦しみ」の意であることは、つぎの引用からもうかがえる。

生苦に五種の相あり、一に那落迦及び餓鬼に生ずる時、又は胎生卵生の時、種種憂苦の随逐するを衆苦所随故苦とし、二に煩惱に随逐せられて性調柔ならず、自在に転ぜざるを鹿重所随故苦とし、三に衰老等の衆苦の所依となるを衆苦所依故苦とし、四に受生し已りて貪瞋癡等の煩惱の所依となり、身心安居ならざるを煩惱所依故苦とし、五に生者必ず死し、意の如くなる能わざるを不随所欲離別法故苦となせり（『瑜伽師地論』第六十一、ここでは「生きる」の意味にまで及んでいる）

何をか生苦と謂う、（中略）母腹中の生藏の下、熟藏の上に在り、母一杯の熟食を噉いて其の身体に灌がば鑊湯に入るが如く、母一杯の冷水を飲まば亦寒氷の体を切るが如し。母飽く時は身体を迫促して痛みを言うべからず、母饑ゆる時は腹中了了として亦倒懸の如く、苦を受くること無量なり。其の満月に至りて生れんと欲する時、頭を産門に向くるに劇きこと両石挾山の如し。生れんと欲する時、母危み父怖れ、生れて草上に墮つるに、身体細軟なれば草其の身に触るるや、刀剣を履むが如く、忽然として失声大呼す。此れは是れ苦なりや不や。諸人咸く言わく、此れは是れ大苦なり（『五王経』）

以上を前提として、次回は、アメリカの新しい統合的心理学であるトランスパーソナルの理論と比較しながら、「生苦」および「生死一如」の考察をしていくことにする。

## ◎「維持会員」へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてみいりました。現在、『浄土』誌は五十五巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してみいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

四

行

詩

鉄線の花

亡父の造った竹棚に  
白く咲く 紫に広がる  
大きく 高く  
潔よくあれ

清<sup>きよ</sup>  
川<sup>かわ</sup>  
宗<sup>そう</sup>  
治<sup>じ</sup>

(詩人)



(童)(話)(の)(世)(界)  
〔Ⅱ〕

## 音(その二)——「コココココってなんの音」



ぬのむらてつや

ぼくは地面におちた南天の実。

そこでは木の葉のおばさんにまもられて  
ゆったりやすむことができたのです。

春になっておばさんの姿が見えなくなると  
そのかわりに ぼくのそばではふしぎな音が  
きこえるようになりました。

スクスクスク スクスクスク

ぼくには それが木の葉のおばさんの声の  
ようにおもわれました。

はじめはとても小さな音でしたから じつ  
と耳をすませてきました。

スクスクスク スクスクスク

それはまるでアリの子どももないしよ話  
みたいです。

「土の中のおうちもあきたね。そろそろ外であそびたいね」

「おとうさんやおかあさんにだまって おもてへ出てみようか」

スクスクスク スクスクスク

アリたちのひそひそ話はつづきます。

そんなアリたちの話をきいていると 南天の実はからだがむずむずしてくるのでした。

クスクスゲロゲロ クスクスゲロゲロ

こんどはすこし大きな音です。でもそれはスクスクではなくて クスクスなのです。おかしいなあとおもってそばを見ると 目玉をギョロリとうごかして こつちを見ているガマガエルのおばさんです。

「おばさんは どうしてスクスクっていわないでクスクスっていうの」

南天の实がたずねると

「おかしいからクスクスって笑ったのさ。お

まえさんがあんまりのんびりしているんからさ。わたしなんかずっと前に外の池へ卵をうんできたから いまごろはオタマジャクシがカエルになっっているころだろうよ。それなのにおまえさんだけがゆっくりしているのので っいおかしくなってるね」

ガマガエルのおばさんにそういわれて 南天の実ははさくさくになりました。

そういえば まわりの木の実みんな芽をだしていましたし 花はつぼみをつけているものもあります。

「ほんとにゆっくり休んでしまったらしい。早く外へ顔をださないと またみんなに笑われる」

スクスクスク スクスクスク

でっかい音がして南天の実は土の中で少しい芽をだしたのです。

「とうとうやったぞ！」

ひとつぶの実が やつと南天の木になろう  
としているのです。

外へでていったアリの子どもたちが

「地面の上には あたたかいお日さまがいっぱいあっておいしいごちそうが山ほどあったよ。ああおいしかった」

といいながら帰ってきました。

「アリたちに負けてはいられない。ぼくも地面へ顔をだしたらおもしろいきり空気をすってどんどんのびて 大きな南天の木になってやろう。そしてみんなが目を見張るような真っ赤な実をたくさんつけるんだ。そうしたらアリも花もガマガエルのおばさんも きつとおどろくにちがいない。あののんびりやの南天の実がねえって」

スクスクスク

さあもう少しで地面です。頭の上があかるくなつて顔をだそうとしたときです。

ドシン！

芽のうえに何かがおちました。いったいなんなのでしょう。もういちどスクスクウーンとのびあがつてみましたが それはぜんぜんうごきません。それどころかまたその上へつまかさねられたようです。

頭の上がずっしりとおもくなりました。上で人間の話す声がします。

「これはいい形の石どうろうだ。この場所にちょうどいい」

「ああなんていうことだ。よりによってこれから出ようとするま上におくなんて。人間は勝手すぎる」

うらめしそうに上を見あげながらいう南天の実の耳に スクスクという音がきこえます。

「よし、がんばって石をどけてやるぞ」

おもいきり芽をのばしてみたのですが  
「イタタタタ……」

石はびくともしません。もういちど「よいしょよいしょ」とおしてみましたがだめです。「もう少しだというのに。くやしいなあ。このままここでくさってしまうのだろうか。赤い実になることもできないで。なんのためにスクスクという音をきいて　ここまで生きてきたんだろう。もうそんなの聞きたくない」南天の実は耳をおさえるのでした。それでもまだ

スクスクスク　スクスクスク

「うるさいなあ、やめてくれ」

そうさけんだとき　とつぜん奇妙な音がつたわってきたのです。

ココココ　ココココ

いままでに聞いたことのないひびきなのです。

のびる元気もなくして　すっかりしおれていた南天の実は耳をすませました。たしかに

その音は地面のほうからきこえてくるのです。

ココココ　ココココ

それは歌をうたっているようでした。

『ココココ　ココココ　コケコッコー。』

わたしと妻のメンドリは　八年まえのこの丑月　若さいっぱいコケコッコー。

メンドリ卵をうみつづけ　やがてかわいひナたちは　親の羽根から顔だして　ビヨビヨビヨとえさねだる。

ココココだよ　口うつし

ココココだよ　口おあけ

ココココだよ　えさあるよ

ココココにも　えさあるよ

コココんなに　えさあるよ

ココココだよ　さあおいで

大きくなってビヨコたち　それぞれどこへいったやら。どこでどうしているのやら。

わたしの妻のメンドリは　きょねんの秋に

土の中、ふたたび姿は見せないが わたしは  
ここにいるんだよ。

ココココ ココココ ここにいる

ほらほらここに えさがある

さあさあみんな たべるんだ

わたしがいるとこ みんないる

みんないっしょだ ここにいる

コココ コココと いつまでも』

土の中までつたわってくるのは オンドリ  
の声でした。

南天の実は あたたかい日ざしの下で仲よ  
くえさを食べているオンドリとメンドリとヒ  
ヨコたちを目にうかべながら ずっと前に木  
の葉のおばさんが話をしてくれた あの池の  
そばで炎のような赤い顔をよせあっている  
ひとつぶひとつぶの南天の仲間たちのことを  
思っていたのです。

ココココ ココココ ケコッコー

コココの声はまだつづいています。

「そうか そうだったのか。ここにいるのは  
ぼくひとりじゃなかったんだ。つながった仲  
間がここにいる。みんないっしょにここに  
いて まわりでスクスクたすけてくれる。

上へのびることばかりがスクスクじゃな  
かった。上へのびられなかったらここから下へ  
のびよう。ここでしっかり根をはろう。ここ  
にいて下へも横へもスクスクとたくさん根  
をはればいい。ここにはみんながいるんだか  
ら」

スクスク コココ

スクスク コココ

南天の実は そんな音をききながら土の中  
へ根をのばしていくのでした。

(つづく)

◇ ◇ ◇ 新刊紹介 ◇ ◇ ◇

安居香山 著

## 緯書と中国の神秘思想

漢代思想と緯書、道教と緯書、  
緯書の成立とその種類、  
神秘思想と科学などを易しく説く。

◇ ◇ A5判・三〇〇頁・定価二〇〇〇円 ◇ ◇

《発行・発売》

平 河 出 版 社

〒一〇二 東京都千代田区隼町三一―二

TEL(〇三)二六三一四八八五 振替(東京)一一一七三三四

緯書は迷信でもなければ、異端の書でもない。

れっきとした儒教の思想の流れである。

それは、漢代の時代思想を代表し、それ以後の中国思想にも深く根をおろしているのである。

## 海と山の狭間で

—我が思い出に住む犬たち(12)—

木の  
下  
隆  
一

その時子犬は生まれて半月ぐらいたったと思う。吻はまだ発達しておらず、全体にくしやつとした顔立ちに、同じぐらいの大きさの真っ黒な目と鼻が、鼻を頂点とした逆三角形の形で収っていた。耳は立ちきつていず、先端が前に折れてピラピラしているのが、かえって可愛さを増していた。四肢の爪は真っ黒——素早く子犬の特徴を見定めると、私は蓮見小五郎から子犬を受けとった。

稠密な柔毛に覆われてフワッと体を大きく見せているから、それなりの重量がありそうに見えたが、子犬は気抜けする程軽く、薄い皮膚を通してコツコツと骨が手に触れた。そして、トッ、トッと心臓の鼓動が掌に伝わってきた。子犬は薄い膜のかかったような目で

私を見上げて、クルッと小さく巻いた尻尾を振った。

「うわっ、軽いんだ。……まるで骨と皮の重みしかないみたいだ」

「まあ、いまのところはね。これからだんだん肉がついてくる。一日に何気かの割でどんどん体重が増えて行く」

ごく当たり前のことを、小五郎は重大な学説でも発表するかのように言った。昔とった杵柄で、時々尤もらしい香具師の口調が顔をのぞかせた。

「もう目は見えるのかなあ」

と私が訊くと、

「さあ、まだ見えんのじゃないですか。見えんでも、犬は耳と鼻がよう利きますけん、その辺のことはあんまり心配せんでも……」

「この薄い膜のようなものがとれると、見えるようになるのかな？」

「そういうことでしょうな」

このことについては、小五郎はあまり頓着していないようだった。

子犬を母に渡すと、母はしばらく子犬の温もりを慈しんでいたが、そっと箱の中へ返してやった。一番チビの子犬は、団子になって眠っている兄弟たちの上を乗り越えようと、勢いよく母親の乳房に吸いついた。鼻先で母親の腹をグイ、グイ、と突き上げるようにして吸う粗っぽい飲み方であった。

「どうです、なかなかいい飲みっぷりでしょう」

小五郎は満足げに目を細めた。どうやら小五郎は子犬の中ではこのチビが一番気に入っているようで、しかもこれを私に呉れようとしているのであった。他の子犬たちも起き出してきて、それぞれ乳首を探し当てると、貪欲に吸いついた。

「早い者勝ちというのではなく、いつの間にか吸う乳首が決まっているんですよ。どうやって決めるんですかね、不思議ですなあ」

小五郎は母にそんなことを言った。

子犬たちの仕種は見ていて飽きなかったが、母がどう思っているのか、私にはそれが気がかりでならなかった。帰る道々、なぜか二人は無口であった。胸の裡は殆ど子犬を飼うことに傾いていたのに、どちらもそれを言い出せなかったのである。

「もし飼うとすれば、あのチビのかっさいな奴だな」

と私が言うと、母は黙って頷いたが、しばらくして、

「でも、お父ちゃんは反対だと思う」

と言った。

「やっぱり諦めるしかないか」

私も母と同じことを考えていたのであった。

二、三日経って、珍しく父が早く帰宅した日があった。早いといっても時計は九時を廻っていたが、酒が入ってかなりご機嫌だったから、子犬のことを持ち出すには絶好の機会と言えた。

「犬飼ってもいいかな」

私はわざとぶっきらぼうに切り出した。

「犬?! 犬ならハチがいるじゃないか」

「あれは他所の犬。勝手に通い番犬してるだけ!」

「……」

「牡の可愛い子犬がいるんだ。それもハチの子でね」

「ハチの子?」

「うん、面白いことに母親もハチって言うんだ」

父は母が注いだ冷や酒のコップを傾けて一息つくと、

「そりゃ、子犬の一匹ぐらい飼えんこともないが……。犬は生き物だということを忘れるなよ。人間より寿命は短いから当然はやく死ぬ。その別離の悲しみに耐えられる自信があれば、飼うのもいいだろう」

と言った。

「敢えて反対はしないということだね」

私は念を押した。

「ああ、その代り犬の面倒は一切お前が見ろよ。それからお母さんにも言うておくが、ハチの面倒はいままで通り見てやるんだよ」

「それはもう……」

「あれが番犬をしてくれたおかげで、我が家は安泰だったんだから」

父の会社では、幸いそれまで労働争議は起きていなかったが、外部からの接触や圧力で不穏な状態に陥ったことが何度かあり、工場の幹部の家に投石されたことがあったりしたが、我が家だけはそのようなことは全く無縁であった。それはハチが守ってくれていたおかげだと、父は言うのである。私は必ずしもそうは思わなかったが、父がそう信じているのなら、それでいいと思った。

「しかし、うちで犬を飼えば、ハチは寄りつかなくなるだろうな」

父が言った。

「そんなことはないと思うよ。自分の子供だもん、可愛がるんじゃないかな」

「ハチがいつまでも子犬を子犬として扱ってくれるものか。子犬だって成長すれば立派な一匹の牡だ。要するに、子犬はやがてはライバルになる存在なんだぞ」

「虎徹」という名の子犬が我が家の一員となったのは、更に一か月程経ってからであった。乳離れするまでは小五郎に任せだが、預けたといった感じで、私の気分はすでにすっかり飼い主であった。学校からの帰り道、私は何度となく見に立ち寄った。眼球を覆っていた薄い膜が消え、目で物体を識別できるようになると、行動範囲がひろがり、動きは一層活発になった。睫が生え揃うと目元にアクセントがついて、可愛さは増す一方だった。見に行くたびに、兄弟は一匹ずつ減っていた。早々と貰われて行ったのである。私が虎徹を引きとった時、後には一匹残っているだけで、

「二、三日すればこれもいなくなる」

と、小五郎もいくらか淋しそうだった。

「虎徹」というのは、新撰組の隊長近藤勇の愛刀で、古本屋で立ち読みした講談本で覚えた名であった。

△小頼なり、勤皇の犬ども。来るか、今宵の虎徹は血に餓えている!!▽

子供心に、何ともこの台詞の持つリズムが心地よかった。——虎徹か。うん、あのチビの名前は虎徹にしよう。そう思うと、私は忘れないために、コテツ、コテツと呟きながら急いで家に帰った。そして、どれ程名のある刀なのだろうと、あまり期待しないで辞書を引くと、△こてつ「虎徹」▽で出ているのには驚いた。△江戸前期、寛文・貞享の頃の刀工。名は興里。越前生まれ。初め加賀金沢で甲冑工として名があったが、のちに近江長曾<sup>ナガソウ</sup>称に住し刀工になり、さらに江戸に住んで大成した▽と、そこには記されていた。つまり近藤勇の佩刀は、この長曾称虎徹が鍛えた業物だったのである。

虎徹は、一本の牛の脛骨と共にやって来た。これは蓮見小五郎の知恵で、玩具代りに与えておけば歯固めになるし、齧らせておけば、自然にカルシウムが摂取できて一石二鳥だと言うのである。まだ歯が生え揃っていない子犬に牛の骨など与えてよいものかどうか私は甚だ疑問だったが、小五郎が大丈夫だと言うので、右手で虎徹を抱き、左手に骨をぶら下げて連れてきたのである。

虎徹は実によくこの骨を齧った。暇さえあれば玩具にしていたが、特に歯が生える時は

# 『江戸物語』

細田 隆 善八豊明／著

——本誌連載の好評の内容が、江戸情緒あふれる美装本に——

- 四六判／浮世絵ほか写真・図版一五〇点収録
- 定価一八〇〇円【付Ⅱ名所史跡・資料館案内】

△発行・発売▽  
ノ ン ブ ル 社

東京都新宿区新小川町六―三九―七〇一  
電話(〇三)二六九―一二九三 二六七―六六三七  
振替(東京)七―一〇九三／千一六二

痛痒いのか、狂ったように噛みついてた。しかし、この骨のおかげで我が家の履物はバラバラにされずに済んだ。下駄に歯型をつけたことはあったが、あまりにも歯ごたえがないので、興味をなくしてしまったのであろう。

吻がのびて、虎徹はだんだん犬らしい顔つきになってきたが、耳は相変らず先が前に折れていて、一向にピンと立つ気配はなかった。冬の間も病氣一つせず、チビはチビなりに順調に育った。日一日と知恵がつき、思いがけないことをして私たちを驚かせたが、甘ったれで、夜になると、胡座を組んだ私の膝の中で無邪気に眠り、時々夢を見るのか、眠ったままヒーヒーと体を震わせたりした。

◇ ◇ 長 篇 連 載 ◇ ◇

# 伝<sup>でん</sup> 弘<sup>く</sup> の 生 涯 (五)

— 大僧正岩井智海伝 —

松<sup>まつ</sup>  
浦<sup>うら</sup>  
行<sup>ぎょう</sup>  
真<sup>しん</sup>

見えてきた大道

筆者の推定どおり、岩井智海が師の境誉見

明和尚とその檀徒総代・平山能忍福岡区<sup>(住)</sup>長  
(現在の市長に相当)の斡旋で、政府認可の僧侶<sup>(住)</sup>  
となったのが明治八年(一八七五)だったとす  
れば、この年、智海は十三歳であり、一方、

師の境誉は大正元年に八十歳で寂したという没年から逆算して、満で三十五歳のはずであった。

神仏分離令という強権のために、

——僧になれるかなれないか

を、紙一重のきわどさで堪能させられた智海は、まだ少年だっただけに批判の余裕もなく、ただ廃仏毀釈運動の深刻さのみを、ふかく心にとどめたにちがいない。

けれどもその年はまた仔細に見てみると、じつは数年前から勢いを弱めつつあった廃仏毀釈運動に、決定的なダメージを与えた年でもあった。

たとえば、彼自身の僧侶認可に大きく影響した「神仏合併教院廃止通達」は同時に、「神仏合同説教」も差止めしていたし、そのわずか三日後には大教院自体が解散となっていた。

それだけではない。

その年十一月に教部省が各宗教団体に達した「信教自由保証の口達」は、廃仏毀釈運動そのものの息の根をとめた。これでいよいよ各宗派とも、なんの制約もつけず、独自の教化活動ができるようになったのである。

おそらく岩井智海が、生涯の目標を「布教による衆生の教化」にしぼっていったのは、この時期から上洛するまでの、五年ほどのあいだではなかったろうか。

筆者がそのように推理する理由は、前にも引用した「廃仏毀釈の思い出」という随筆の冒頭で、智海が、

『私は福岡県の生まれであるが、九州には明治時代に、福岡に真宗萬行寺の七里恒順和上と長崎に浄土宗大音寺の吉水良祐和上とが出られた。どちらも信仰中心

で進取的に伝道された方で、その功績は大に見るべきものがあつた。現に今日に至るまで、九州ではこのお二人の大きな感化を受けている』

と書いているからである。

七里と吉水は明治初期、ともに舞台は九州が主だったが、日本全国にその徳風がおよんだ布教師であつた。

もっとも七里は九州の生まれではない。天保六年（一八三五）、新潟県三島郡越路町にある西本願寺派の明鏡寺に生まれた。それが九州に住みつくことになったのは、十四歳から同じ越路で、僧朗、宣界という二人の師に学んだあと、おなじ西本願寺派の学僧・月珠勧学につくため二十歳はたのとき大分県へでかけたからである。

高齢の月珠没後も、さらに三十歳になるま

で三人の学僧についたが、三人ともぜんぶ大分の人なのである。これでは根がはえるのも無理からぬしだいが、彼を福岡の萬行寺へ婿養子として世話したのは大分人ではなく、新潟の宣界勧学であつた。

文献をみると、『徳風いやましに高い名僧』もしくは『生き仏』というのが、七里恒順を修飾するのによく使われる言葉だが、しかし新潟をでるとき家族に、

「学問を大成して、桐棒の駕籠にのつて帰るようになるまでは、決して郷里の土を踏まない」

と言に残したという挿話があるから、若いときはそれなりに覇気の強い人でもあつたようである。

この和上が頭角を現しはじめたのは、萬行寺に入ってからである。しかもその真骨頂は終始一貫して、伝道にすべてを傾けつくした

ところにある。

まず第一番に始めたのが、真宗の学徒を対象とした甘露窟と名づける塾の開講である。

ついで寺族の信仰を教養するための坊守講を開き、さらに恵以真会、要籍会、開明会、莊嚴講など、いずれも対象は一般人におきながらも、内容はそれぞれに異なるという会や講をつくった。また六歳から十五歳までの少年男女を対象にした教童講というのを開き、少年伝道にも情熱をそそいだのだった。

これほど間口の広い、かつ多彩な伝道の道場を主催し得たというのも、彼が十四歳から三十歳まで、十七年間も学び続けたというその蓄積があったなればこそであろう。教童講への参加者も、発足日は少年と少女でそれぞれがったが、少年のほうは二百名、少女は四百名を数えたというから、人気のほどがしのばれる。されば常光浩然著の「明治の仏教

者（上巻）」にも、

『——こうして彼の努力は、日一日と成果が現われ、三年たち五年たつうちに、七里恒順の名はようやく九州全域に広がり、やがて中国に伝わり、近畿に聞こえ、その徳望を慕い、全国から集まるもの日を追って盛んとなった』

と記されている。

七里の「徳望」がどんなものであったかを知るには、ある挿話で彼の人柄を語るのことも適切であろう。

それは萬行寺に入ってからのことだが、ある夜、彼が念仏している最中に盗人がしのびこんできた。明治の初期だから刀を持っているとは思議はないが、それを突きだして「カネをだせ」とやった。しかし念仏に夢中の恒

順は気がつかない。二度目にやっと、

「いま何かいったか」

「カネをだせといったのだ」

「ああ、カネか」

とやおら立ちあがり、賊を従えて自分の居間にともない、簞笥を指して「明日は税金をおさめる日だから、その分だけ残しておけ」といった。賊が紙幣を何枚か抜きとり、そのまま立ち去ろうとすると、大きな声で、

「待て。人から物をもらったら礼をいえ」

と浴びせかけた。これには賊もよほど驚いたらしい。あわてて「ありがとう」といったそうである。

ところがこの賊が間もなく警察に捕まった。

被害者として恒順も呼び出され、刑事が調書をとろうとするのだが、「いや、カネをやったことはあるが、とられた覚えはない」の一点張りである。刑事が困って賊と対決させる

と、賊は「たしかにこの和尚からとりました」という。すると恒順が逆襲した。

「はてさて物忘れの早い奴じゃ。やったらこそ礼をいったではないか」

これには賊が感動した。そしてついに改心し恒順の弟子となり、萬行寺で長く手伝いをした、というのである。

この挿話は当時、有名だったらしい。三宅雪嶺も七里恒順の没した翌月の雑誌「日本及び日本人」にその追悼記をのせ、

——盗賊の過ちを悔いて、正業につきし者も亦少なからず。

と、事実そのものではないが、そうしたことがあったことにふれている。

超俗の挿話には出家ならではの味わいがある、多くの人がとが好むところであり、じつさいまた高僧名僧といわれる人ほど、そうした逸話が多い。恒順もまたその域に達して

いた、近代の指折りの一人だったのである。

その七里恒順が萬行寺に入ったのは元治元年（一八六四）十一月のことだが、そのころの萬行寺は経済的にきわめて不如意で、彼は好きなタバコも喫えず、二年間も「休煙」していたというから、入寺しても数年のあいだは、伝道場を開けるような暮らしぶりではなかったかもしれない。

しかし彼は、明治七年（一八七四）八月には「中講義」、追いかけてその半年後の翌八月一月には「大講義」という説教師の位（注3）を明治政府から与えられているから、もうそのころにはいくつかの道場も開講して、「七里恒順」の名はかなり世間に聞こえていたものと思われる。

そしてこの物語の主人公・岩井智海が、教導職試験の受験前後から、知恩院で加行をうけに京都へ出発するまでの五年間に、しばし

ば七里の説法なるものを耳にしたであろうことは、容易に想像がつく。ちょうどそれは、すでに述べたように政府が従来の宗教政策を一擲して、「信教の自由」を保証したのと時期を同じくしており、「説教」は七里のもっとも得意とする「説法」にかえって、彼の口からはあたかも魚が水を得たような名調子が、ほとばしりでていたことであらう。

実際、七里の説法は衆にぬきんでたものであったらしい。三宅雪嶺はそれを評して、

『真宗の僧侶は説教に慣熟し、中には聞く者をして、感きわまりて落涙せしむる者あれども、その人となりの下劣なるよりして、折角聞く者をして感嘆せしめながら、これに心志を高むるにおいて何等の功あらず、落語家が人を泣かしむると異なるなしとす。然れども、幾多真宗の

僧侶のうち、時に傑物なきに非ず。先月下旬、入寂せる七里恒順師は、実に教導家の模範とするに足る。品性の高きは云ふをもちいず、法を説き、人を善に導くの妙なる、古来多く見ざる所……』

と書いているほどで、少年智海もまたその名調子に陶醉し、将来の自分の姿をそれにかさね合わせて描いていたことであろう。

たしかに岩井智海には、ひそかに七里恒順に倣なまおうとするところがあつたように思えてならない。『品性の高きはいふをもちいず』と三宅は書いているが、筆者が取材した、岩井智海の説法を実際に聞いたという人で、その高尚さと作法の厳格さをあげない人はなかった。

たとえば七里は、説法を始める前の二、三十分は誰とも話をせず、静かに瞑目めいもくして構想

を整えてから、高座にのぼったといわれているが、智海にもそういうところがあった。ただし彼の場合は構想のほうではなく、むしろ氣息を整えることに重点がおかれていたようである。

というのが、京都・小松谷の正林寺住職で布教界の長老でもある吉澤堯州は三十一、二歳のころ、京の尼僧寺院・光照院で行われる五重に智海が勸誡師となつたとき、請われて教授師をつとめたことがあるが、

『そのときに非常に厳格な人やなということを強く印象しました。とくに威儀作法、これを非常にやかましくいわれた。布教師たるものは本堂へでる場合、一挙手一投足をみなが見ているのだ。仮りに百人の受者がいるとすれと、合掌しながらも二百の目が集中して、出てくる姿と

いうものをみつめている。だから一足一足の歩く姿から気をつけねばならん——これを非常にきつくいわれた。

これはそうなんです。布教する者は態度を莊嚴しょうげんにしないと、信仰への第一歩がそこで崩れてしまう……』(吉澤堯州談話)

と語るのだが、その「出」のときの態度の莊嚴のためにも、氣息を整える必要はあったであらう。

ことのついでに、もう一つ、七里との類似をにかけておこう。

七里は人から説教の心構えを聞かれると、「一人でも多くのひとを参詣にこさせたいなら、因縁ばなしをするとよい。しかし私は百人にほめられるよりは、一人の信者に笑われることを恥じる。それゆえに因縁ばなしはしないのだ」

といったという挿話が残っている。

たしかに因縁ばなしは、現代でも客集めに大変、効果のあるものらしい。

筆者はかつてある雑誌からの依頼で、すでに物故しておられたさる高名な新宗教の教主といわれる人の、略伝めいたものを書いたことがある。

そのときその教主の死因を、遺族や教団の主だった人に取材したのだが、みなが口をつぐんでしまって、なかなかつかむことができなかった。しかしなんとなくガンだったらしいという想像はついてきた。それでこんどは確認をとうとうとしたのだが、これもまた言葉を濁されてしまうのである。主治医に聞くという手もないわけではなかったが、ま、あまり大したことでもないのでもそこまではやらず、ついに書かなかったことがあった。

あとで知らせる人があってわかったのだが、

やはりガンで亡くなっていたのである。

エイズとでもいうのならともかく、ガンはある一定の年齢に達した人にはごくありふれた病いにすぎない。だのになぜそんなに隠そうとしたのか、見当がつかなかったが、これもその人が教えてくれた。ガンに因縁ばなしをからめて話すのに信者獲得になかなか効きめがあるというのだ。その教祖はいつも一段高い席から、

「信仰がたりないからガンなんぞにかかって死ぬるんだ」

と信徒たちを叱りとばすのを常としていたという。その当の本人が「ガンで死にました」ではサマにならないどころか、ぶち壊しである。なるほどこれは口が腐つてもいえないかったであろう。

他人の不幸やつまづきを因縁ばなしで色づけして、さあどうだとノド元に刃ものを当て

るといふのは、大昔からあるその方の手くだったにちがいない。されば七里は「一人の信者に笑われることを恥じる」といったのであろうが、岩井智海もまた当然のことながら、それをやらなかった一人であった。彼は、俗にクスグリという、聴衆にこびてこちらから笑いをとりにゆくということも、したことがなかった。浄土宗侶で児童文学者で「中外日報」の役員でもあった高橋良和は、

『岩井さんの説教は何度も聞きましたが、笑わしたり泣かしたりということがなかった。かつまた色気のある話で聴衆の気を引くなんてとんでもないことだね。五重の勸誡でもまことにオーソドックスなものでした。それだけに衆座からちよつとささやき声でも聞こえようものなら、  
「私語はやめなさい。やめないなら私が

やめます」——そんなところがあった。  
なかなかうるさいんです。それでいて聴衆を魅了し慕われること、天下一品だったんだから、不思議な魅力の持ち主というしかないねえ』（高橋良和談話）

と語るのだった。その魅力の源泉がどこから来るかをさがし尋ねるのが、じつはこの物語の目的の一つでもあるのだ。

岩井智海が『廃仏毀釈の思い出』で七里とともにあげているもう一人の高僧・吉水良祐（よしみづ）もまた、一世を風靡した名布教師であった。

良祐は文政六年（一八二三）、肥後国すなわち熊本県天草の在家に生まれた。七里恒順よりも十二歳の年長である。幼いころ同じ天草の天草山崇円寺で、道誉良慶から得度をうけた。

長ずるにおよんで江戸（東京）の増上寺順応寮に学び、弘化元年（一八四四）には二十一歳の若さで三島谷の教頭に補せられている。人品、学問、ともに出色のものがあつたのであろう。ふたたび天草に帰り、師のあとをついで崇円寺住職となつたのは、明治二年のことである。

その二十年後には推されて鎌倉の大本山・光明寺に晋董したが、以後は順風満帆というか、関東十八檀林の中核である東京小石川の伝通院、さらに京都の大本山・清浄華院の法主と、浄土宗侶としてはトップ級のキャリアを踏んだ。

これらのすべては、彼の布教師としての名声によって、もたらされたものである。

神仏分離令がまだまだハバをきかせていた明治六年二月、彼は維新政府から大講義に任ぜられているし、ついでその翌年には教部省

の特令で（浄土宗でないことに注目されたい）、長崎の大音寺住職となり、同地の警察から女工場の布教を依頼されていることからみても、説教には並みはずれて秀でていたこと、七里と同様で、聞く者をして随喜の涙を流させたと言えられる。

そして多分、崇円寺と大音寺両時代にはさまれたことだと思われるが、この上人は同じ天草島牛深市の無量寺において、十八世住職をつとめている。浄土宗議会の前議長・三宅春光は、その無量寺の現在の住職であるが、彼は吉水良祐について、

『かの上人は大阪で突然、客死をなさったが、そのとき「毒殺」ではないかという噂が立った。というのがね、この上人の説教があるという、大阪中の芝居小屋がカラになるんだね。つまり芝居の客

までがそっちのほうへ行行ってしまっわけだ。これではオレたちのアゴが干上がるというので、芝居者が一服、盛った……。ま、誰が作ったのか知らんが、そういう話がまことしやかに伝えられた。つまりはそれほど説教がうまかった、ということでしょうね』（三宅春光談話）

と、筆者に語るのだった。

岩井智海が教導試験を受験した明治八年、吉水良祐は五十二歳であった。大音寺への晋董はその前年である。当時の日本はまだまだ交通機関など皆無にひとしく、牛馬や汽船を利用できる者は別として、庶民は足だけが頼りの時代だったから、遠隔地の巡錫などとはとうてい無理であつたろう。しかしそれでも、ときには福岡あたりに足をのぼすことがあつたかもしれない。そして智海は、七里のとき

と同様に、良祐の説法を聞いてますます人生の目標を、布教師という一点に絞っていったのではないか。

このようにして、やがて智海がスタート台に立つ日がやってくる。

(つづく)

(注1) 『政府認可の僧侶』は現代人にはなじ

めないが、江戸時代、幕府は神社奉行をおき、寺院・神社を統制下においた。

明治政府も発足後しばらくの間、その政策を踏襲し、僧侶の任免を太政官への願い出案件としたのである。この制度は明治十七年八月の「神仏教導職廃止、住職任免・教師等級進退などを各宗管長に委任、各教規宗制策定」の公布までつづいた。それは「信教の自由保証口達」後、八年と九ヶ月後のことだった。

(注2) 三宅雪嶺(一八六〇～一九四五)は明治

・大正・昭和の評論家、ジャーナリス

ト。金沢藩医・三宅恒の三男で本名雄二郎。東大哲学科卒。早大の前身・東京専門学校で政治科講師をへて雑誌『日本人』(のち『日本及日本人』と改題)を創刊、政府の欧化主義に対し日本主義を主張する評論家として活躍した。昭和十八年、文化勲章を受章。

(注3) 維新政府は明治五年、公民教育のため

神官僧侶を対象に教導職制を導入し、教導職を、大教正、権大教正、中教正、権中教正、少教正、権少教正、大講義、権大講義、中講義、権中講義、少講義、権少講義、訓導、権訓導の十四階級に分けた。

(注4) 高橋良和師は筆者が取材して間もない

平成元年四月二十五日、心不全のため遷化された。ご冥福を祈念します。

(注5) 吉水良祐の履歴については大橋俊雄著

「浄土宗仏家人名事典・近代篇」と、

「三宅春光談話」(後出)に拠った。

## ◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

### 「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十五巻 五月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成元年 四月二十五日

印刷

平成元年 五月一日

発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番  
〒一〇三 振替東京八一八二二八七番

◇ ◇ ◇ 新刊紹介 ◇ ◇ ◇

寺内大吉のライフワーク

寺内大吉 著

## 『立ち止まるな善導』

歴史像でとらえた念仏者・善導!!

法然「偏に善導一師に依る」、親鸞「善導独り仏の正意を明かせり」。日本浄土教に決定的影響を与えた中国唐代の念仏僧と時代背景を描く——好評の本誌連載の長編!!

A5変型 四七四ページ 定価一八〇〇円

《発行・発売》

毎日新聞社

〒100-51 東京都千代田区一ツ橋1-1-1

TEL (03) 221-0311

第五十五巻

五月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行  
平成元年四月二十五日印刷  
平成元年五月一日発行